

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02831

研究課題名(和文)「話し合い」の多文化間比較研究 文化を越えた対話能力の育成を目指して

研究課題名(英文) Multicultural comparative study of "discussion"-aiming to cultivate dialogue ability across cultures

研究代表者

森本 郁代 (MORIMOTO, Ikuyo)

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：40434881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、話し合いの進め方や評価の観点に関して、多文化間の比較研究を行い、グローバルに利用可能な対話能力育成プログラムを開発するための基礎的資料を得ることである。日本人学生、韓国、中国、台湾出身の留学生による話し合いとアンケート、インタビューの分析を行い、話し合い参加者の間の「異文化性」、言語能力の差、話し合いのテーマに関する前提知識の有無が話し合いの進行に与える影響を明らかにした。さらに、話し合いの参加者の満足度など内面的側面を考慮に入れた話し合いの指導の必要性を見い出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化が進展し、大学における留学生の受け入れが増大する中、日本人学生と留学生の両者が参加する協同学習の授業を開講する大学も出てきており、日本人学生と留学生によるグループディスカッションも行われているが、話し合いをどのように進めるのかについての指導はほとんど行われていない。本研究は、大学で行うべき、多文化間において発揮される文化を越えた対話能力の育成とそのため教育方法を開発するという独創的な研究プログラムの一部であり、本研究で得られた知見は、プログラムの開発に不可欠な基礎的な資料として今後活用されることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to conduct a multicultural comparative study on the viewpoints of discussion and evaluation, and to obtain the basic data for developing a globally available dialogue capacity building program. We analyzed discussions in which Japanese, Chinese, and Korean undergraduates were discussing social issues, and conducted questionnaires survey and interviews with them. The analysis showed the following three points: 1) participants were oriented to "interculturality" among them and utilized it to move their discussion forward, 2) while the differences in Japanese language abilities are less likely to affect the process of the discussion, the knowledge about the discussion topic has a considerable impact on it, 3) internal aspects such as satisfaction of the participants should be taken into account in training their discussion abilities.

研究分野：日本語教育

キーワード：対話能力 異文化 話し合い

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

少子高齢化による人口の減少と経済社会活動のグローバル化が進展する中、高等教育のあり方も大きく転換しつつある。2014年に開始された文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援では、「異なる文化への寛容性を持って地球規模課題の解決や未来の創造に貢献しグローバルに活躍する人材や、グローバルな視点を持って豊かな地域社会の創造に積極的に貢献しようとする志を持った人材」の育成を喫緊の課題と位置付けている。グローバル人材が持つべき能力を「英語力」と結び付ける風潮も見られる中、その能力を「異文化間能力」と捉えて育成のあり方を議論する動きもみられる(西山・細川・大木, 2015)。この異文化間能力を構成する重要な能力の一つが対話能力である。

日本学術会議が2010年に公表した「大学の分野別質保証の在り方について」は、コミュニケーション教育における「対話」という視点の必要性を説いている。対話とは、意見や価値観の異なる人との間の価値のすり合わせであり、親しい人とのおしゃべりである「会話」や、相手の主張の論駁を目的とした「対論」とは区別される(平田, 2012)。対話が重視されるようになった背景には、裁判員制度の開始や、地方行政への市民の直接参加の動向に加え、地域共同体の崩壊や社会の多文化化が進み、異なる価値観の人々との調整や合意形成が必要となってきたという現状がある。海外でも、欧州評議会が2008年の白書で「民族的・文化的・宗教的・言語的背景が異なる個人や集団間で、相互理解と尊敬に基づき、敬意を持って率直に意見を交換することにより成り立つプロセス」としての異文化間の対話の重要性を強調している。したがって、これからのコミュニケーション教育に求められるのは、異なる意見、価値観を持つ人と相互理解を達成しつつ、合意できない場合は合意できないままに協働の可能性を探り、実践する対話能力の育成であり、グローバル人材育成の文脈で考えるならば、多文化間において発揮される文化を超えた対話能力の育成とそのための教育方法である。

一方、日本語教育では、表現スキルの習得が中心で、対話能力に対する関心はほとんど見られない。大学の演習等で行われるディベートも、相手の主張を論駁して勝つための論理的思考力や説得力の育成が目的であり、異なる価値観を持つ人々とのやりとりを通して相互理解を深め、互いの意見や見解のすり合わせの中から新たな価値観を作り出す対話能力を育てることはできない。教育学などでも、対話や話し合いは協同学習のための「方法」としての位置づけに留まっている。対話能力を育成するためには、それ自体を目的とした体系的なプログラムが必要である。

2. 研究の目的

1節で述べた問題意識から、研究代表者は、日本人学生と留学生が、互いの多様な価値観と見解に耳を傾けつつ、それらをすり合わせていく体験を通して対話能力を育成する協同学習のプログラムを開発してきた(大塚・森本, 2011; 森本・大塚, 2012)。プログラム開発の中核は、参加者が自分たちの話し合いを客観的に振り返るための評価指標であるが、その策定過程で明らかになったのは、日本人学生と留学生とでは話し合いを異なる観点から評価する傾向があるということである。日本人学生が話し合いの場の雰囲気や参加者の関係性、議論のまとまりを重視するのに対し、留学生は議論の活発さや緻密さを重視していた(森本・水上・柳田, 2013)。さらに、こうした評価の観点の違いは、各々が良いと考える話し合いの進め方の違いにも結びついており(森本, 2015; 森本・水上・柳田, 2015)、その違いが原因で、対話のプロセスに問題が生じる可能性が示唆された。この結果を踏まえ、研究代表者は、価値観や意見の相違だけでなく、話し合いのプロセスに対する評価の相違から生じる問題をもリアルタイムに認識できるメタな視点を持ち、その解決に向けて協調的な行動が取れる力を対話能力の重要な要素と捉え、育成プログラムの開発を行ってきた。

その一方で、このプログラムの中核をなす話し合いの評価指標が、日本国内の話し合いの分析に基づいていることから、日本の文化や慣習が、この評価指標において暗黙のスタンダードとなっている可能性は否定できない。文化を超えた対話能力を育成するためには、日本国内における日本人学生と留学生の対話というローカルな場面にとどまらない、グローバルに応用可能な多文化間の対話の評価指標のあり方を検討する必要がある。

以上を踏まえ、本研究は、対話の一形態である「話し合い」の進め方や評価の観点に関する多文化間の比較研究を行い、その成果をこれまで開発してきた対話能力育成プログラムに取り入れることで、グローバルに利用可能な対話能力育成プログラムを開発することを目指す。具体的には、日本人学生と、政治的な緊張関係が続く東アジア(韓国、中国、台湾)出身の留学生による話し合いの分析を通して、互いの対話を促進できる能力を育成するための基礎的資料を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

日本人学生同士、同じ母語の留学生同士、多文化間の3つのグループを作り、正解のない社会的なテーマについて話し合いをしてもらった過程を録画した。併せて、参加者に事後アンケートと事後インタビューを実施した。具体的なデータ収録プロセスは以下の通りである。

まず日本、韓国、中国からの学生を各4人ずつ集め、そのうち、毎回メンバーを替えて3回話し合いを実施するグループ3つと、各国出身者が一人ずつ参加し、同じメンバーで3回話し合いを行うグループを1つ作った。前者のグループでは、1回目は国ごとにグループになり各自の母語で、2、3回目は各国1人ずつからなるグループで日本語による話し合いを行った。テーマは、

1 回目が「ペットの殺処分を減らすにはどうしたらよいか」、2 回目が「SNS の利用に年齢制限をつけるべきか」、3 回目が「学校の給食費の未納問題を解決するにはどうしたらよいか」である。話し合いの前に各参加者にテーマに関する異なる資料を与え、20 分間で結論を出すよう指示した。

分析にあたっての研究設問は以下の3点である。

- (1) 話し合い参加者の異なる文化的背景が、話し合いの進め方にどのような影響を与えるか
- (2) 参加者の言語能力の違いが話し合いの進め方にどのような影響を与えるか
- (3) 話し合い参加者の満足度などの内面的な評価は、話し合いの進め方やプロセスとどのような関係があるのか。

4. 研究成果

- (1) 話し合い参加者の異なる文化的背景が、話し合いの進め方にどのような影響を与えるか

本研究では、日本人学生と留学生の話し合いにおいて、「異文化」がどのように有意味(relevant)になっているのかを、成員カテゴリー化 (Sacks, 1972) の実践に焦点を当てて分析を行った。成員カテゴリーとは、相互行為の中で参加者を特徴づけるのに用いられる属性のことであり、「男性」「教師」「親」「若者」「30代」といった、性別、社会的・家庭内の立場、年代や、本研究が対象とする「日本人」などがそれに当たる。西阪 (1997) が指摘しているように、従来の異文化間コミュニケーション研究は、参加者の文化的アイデンティティを特徴づけるカテゴリーを、対象とする現象の説明変数と捉え、それらのカテゴリーがその現象にどのような関連性を持っているかどうかについては考慮されてこなかった。西阪 (1997) は、ラジオ番組における外国人留学生に対するインタビューの緻密な分析によって、「異文化間」であることが所与のものではなく、そのつどの相互行為の具体的な展開を通して成し遂げられることを例証している。本研究も、話し合いの中で、「異文化」がどのように有意味になっているのかを、「日本/日本人」といった参加者の出身国を用いた表現に焦点を当てて分析を行った。

成員カテゴリー化の実践を見る上で重要なのは、Sacks (1972) が定式化した成員カテゴリー化装置が、そのつどの相互行為の組織化にどのように関わっているかである。成員カテゴリー化装置とは、カテゴリーの集合とその適用規則から成る。カテゴリー集合とは、家族 {父、母、子など}、学校 {教師、学生など}、病院/医療 {医師、患者、看護師など} といった、一つ以上のカテゴリーを要素として含む集合のことを指す。ある人物に対してカテゴリーが適用されている時は、そのカテゴリーが属するカテゴリー集合が適用される。例えば、診察室で「先生」と呼びかけた場合、相手を「医師」としてカテゴリー化すると同時に自らを「患者」としてカテゴリー化している。他方、成員カテゴリー化の実践は、必ずしもカテゴリー名を使って行われるわけではない (串田・平本・林, 2017)。後で詳述するように、本研究においても「日本」「韓国」など参加者の出身国名による場所の定式化が、カテゴリー化を実践している事例が多く見られた。

分析対象とするデータは、3 節で述べた収録データのうち、日本人学生、韓国人留学生、中国人留学生の3名によるグループディスカッション9回分である。「ペットの殺処分を減らすにはどうしたらよいか」「SNS の利用に年齢制限をつけるべきか」「学校の給食費の未納問題を解決するためにはどうしたらよいか」というテーマで、それぞれ20分間の制限時間内で結論を出すよう指示をして話し合いをしてもらい、その場面を録画したものを分析に使用した。なお、参加者間の知識に大きな差がつかないように、各テーマについての共通資料と、参加者ごとに異なる資料を配布した。

分析の結果、「日本」など出身国のカテゴリー名が頻繁に用いられ、相手の国に関する情報を求めたり、自国の情報を提供していた。さらにこうした情報要求や情報提供が、意見の主張、疑問の提示、相手に対する反論などの行為の媒体 (vehicle) となっている例も多く見られた。このことは、参加者たちが互いに「異なる国の出身」であることに敏感であることを示すと同時に、異文化性を話し合いを進める上での資源として利用していることを示している。参加者たちにとって、「異文化」が常に有意味であるわけではないが、異文化性もまた、相互行為の組織化において利用可能な資源の一つであることが示されたといえる。

さらに特徴的なのは、カテゴリー化の方法である。多くの場合、「日本/中国/韓国」といった国名による場所の定式化が用いられていた。Schegloff (1972) は、話し手による聞き手の成員カテゴリーの分析が場所の定式化に反映されていることを示し、場所の定式化と成員カテゴリーが密接に結び付きうることを指摘したが、本研究のデータでも場所の定式化が受け手のカテゴリー化の手段として用いられていた。その一方で、「日本人/韓国人/中国人」という国籍によるカテゴリー化の例は自分自身に対して用いる以外には数えるほどしかなかった。国籍カテゴリーではなく国名による場所の定式化が用いられたのは、「〇〇人」という出身国による明示的なカテゴリー化を避けることに参加者が注意を向けていた可能性が考えられる。

- (2) 参加者の言語能力の違いが話し合いの進め方にどのような影響を与えるか

(1) で用いたデータでは、日本人学生が主導権を持つ場面が多く見られたが、留学生の日本語能力が上級レベルだったこともあり、言語能力がその要因となっているというよりは、テーマに関する知識の有無が大きく影響していることが、発話の分析とインタビュー結果から明らかになった。特に「ペットの殺処分」と「給食費未納問題」は、日本では社会問題となっているも

の、中国や韓国では問題となっていなかったり、社会的な認識に差があったりするため、事前に資料を配布したにもかかわらず、参加者間の知識や関心にも大きな差が見られた。20 分の話し合いの間にそうした差を埋めるのは難しいことから、話し合いの授業の設計において、テーマの選定を慎重に行うことの重要性が示された。

この結果を受け、2018 年度に実施した、交換留学生と日本人学生による話し合いの授業では、「若者言葉の使用」「小学生のファッション」「E スポーツをスポーツとして認めるか」といった、個人の価値観や規範意識が前面に出るテーマを採用した。この時の交換留学生の日本語レベルは中級後半から上級であり、2016 年度の話し合いの参加者と比べると日本語能力には幅があったが、日本人学生が司会をすることが多いものの、一方的に主導権を握るという場面は見られず、全員が活発に意見を述べていた。以上の結果から、言語能力の差が話し合いの進行にある程度は影響を与えるものの、テーマの設定がより大きく影響する可能性が示唆された。

(3) 話し合い参加者の満足度などの内面的な評価は、話し合いの進め方やプロセスとどのような関係があるのか

本研究では、話し合いに参加した当事者のふり返りを通して、「よい話し合い」とは何かを再考した。研究代表者らが開発した「自律型対話プログラム」(大塚・森本, 2011; 森本・大塚, 2012)では、話し合い観察者の印象評定を用いて7つの評価指標を設定し、この指標をもとに他グループの話し合いを観察し評価する「フィッシュボウル」という方法で効果的な話し合いの方法を学ぶ。しかし、この評価方法は話し合いのプロセスなど形式的な面に注目しており、話し合いの満足度といった当事者の内面的な評価が十分に反映されているとは言い難い。そこで本研究では、話し合い参加者の経験や感覚に重きを置いて話し合いの評価を考察した。

分析データは、3 節で述べたプロセスのうち、3 回目に同一グループになった日本、韓国、中国の学生に、自身の参加したすべての話し合いの映像を見せながら実施したインタビューを対象とした。特に各学生が話し合いの体験を重ねる中でどのような価値観を形成し、それが3 回目の話し合いの評価にどう影響しているのかに注目した。

その結果、話し合いへ「参加すること」が話し合いの「満足度」に深く関わることが明らかになった。しかし、話し合いへの「参加」が何を意味するかは、人によって異なることも浮き彫りになった。この結果を踏まえると、話し合いの訓練において、いかに参加者の参加感や満足度などの内面的側面も考慮に入れた指導や評価をするべきかについて、今後さらに検討を重ねる必要があることが明らかになった。

以上3つの研究によって得られた知見は、以下の3点にまとめられる。

(1) 多文化間の話し合いでは、参加者たちは自分たちが「異文化」であることを積極的に利用して話し合いを進めていく。このことから、参加者間の異文化性は話し合いにおいて有用な資源であることが分かった。その一方で、「日本人／韓国人／中国人」といったカテゴリー化の実践は、自分自身をカテゴリー化する際には用いるが、他の参加者をカテゴリー化する方法には、「日本／韓国／中国」という場所の定式化が多く用いられていた。このことには、相手の国の人々に対するステレオタイプとして自分の意見が理解されることを回避することに対する志向が表れていると考えられる。

(2) 言語能力の差は、中級後半以上の留学生であれば、それほど大きな問題とならない。重要なのは、全員がそのテーマに関心が持てるかである。テーマに対する参加者の認識や、出身国における事情の違いは、話し合いを活発化させる要因となる。その一方で、違いが共有された先に、どうやって合意形成を行うのか、という点については、うまく行かないことも多いため、話し合いの授業を通して学んでいく必要がある。

(3) 一見うまく行っている話し合いでも、参加者が「話し合いに参加した・貢献した」と思えない場合、満足度が高くないことが明らかになった。話し合いの訓練において、参加者の内面的側面を考慮に入れた指導方法が必要である。

グローバル化が進展し、高等教育機関における留学生受け入れと日本人の海外留学への送り出しが、教育行政において重視されている一方で、日本人学生と留学生がさまざまな問題について議論をする機会はまだ限られている。他方、近年、留学生の受け入れ増加とともに、日本人学生と留学生の両者が参加する協同学習の授業を開講する大学も出てきており、日本人学生と留学生によるグループディスカッションも行われているが、話し合いをどのように進めるのかについての指導はほとんど行われていない。本研究は、多文化間において発揮される文化を超えた対話能力の育成とそのための教育方法を開発するという独創的な研究プログラムの一部であり、本研究で得られた知見は、プログラムの開発に不可欠な基礎的な資料として今後活用されることが期待できる。

<引用文献>

- ①西山教行・細川英雄・大木充（編）（2015）『異文化間教育とは何かーグローバル人材育成のために』くろしお出版.
- ②平田オリザ（2012）「日本語教育と国語教育をつなぐ「対話」」鎌田修・嶋田和子（編）『対話とプロフィシエンシーーコミュニケーション能力の広がりと高まりをめざして』28-44, 凡人社.
- ③大塚裕子・森本郁代（2011）『話し合いトレーニングー伝える力・聴く力・問う力を育てる自律型対話入門』, ナカニシヤ出版.
- ④森本郁代・大塚裕子（2012）『自律型対話プログラムの開発と実践』, ナカニシヤ出版.
- ⑤森本郁代・水上悦雄・柳田直美（2013）「留学生による話し合いに対する評価に影響を与えるコミュニケーション行動」『総合政策研究』44号, 41-52.
- ⑥森本郁代（2015）「留学生と日本人学生の話し合いの評価の観点と特徴」『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』「インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践」編集委員会（編）くろしお出版.
- ⑦森本郁代・水上悦雄・柳田直美（2015）「話し合いの評価の観点とそれに影響を与える相互行為ー留学生と日本人学生の話し合いの分析から」宇佐美洋（編）『評価を持って街に出よう』18-33, くろしお出版.
- ⑧Sacks, Harvey (1972) On the analyzability of stories by children. In Gumperz, J. John & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, 325-345. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- ⑨西阪仰（1997）『相互行為分析という視点ー文化と心の社会学的記述』金子書房.
- ⑩串田秀也・平本毅・林誠（2017）会話分析入門. 勁草書房.
- ⑪Schegloff, Emanuel A (1972) Notes on a Conversational Practice: Formulating Place. In Sudnow, David. (Ed.), *Studies in Social Interaction*, 75-119. The Free Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宇佐美洋	4. 巻 24
2. 論文標題 規範を評価の対象としてとらえる 「価値観の問い直し」を支える哲学的考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語・情報・テキスト	6. 最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宇佐美洋	4. 巻 12
2. 論文標題 「評価価値観」はいかに定義され、いかに構造化され得るか 非母語話者の謝罪文を評価する場合	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本言語文化研究会論集	6. 最初と最後の頁 1 - 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宇佐美洋, 岡本能里子, 文野峯子, 森本郁代, 柳田直美	4. 巻 17
2. 論文標題 「演じること」による教師の変容の可能性 フォーラム・シアターに参加した日本語教育支援者の語りから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 383 403
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14960/gbkkg.17.383	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 柳田直美	4. 巻 8
2. 論文標題 母語話者の「説明」に対する評価指標の開発 - 非母語話者の評価の観点の抽出と妥当性の検証 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一橋日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 81 94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Ikuyo Morimoto
2. 発表標題 Epistemic pointing: multimodal resources for next speaker selection in ordinary Japanese conversation
3. 学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis (ICCA2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森本郁代
2. 発表標題 相互行為の資源としての異文化 - 日本人学生と留学生の話し合いにおける成員カテゴリー化の実践を中心に -
3. 学会等名 社会言語科学会第42回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森本郁代
2. 発表標題 話し合いの経験はどのように語られるのか - 参加者の視点から見た渋谷をつなげる30人プロジェクト -
3. 学会等名 LORC公開研究会「話し合いが、人・組織・まちを変える」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 水上悦雄, 劉礫岩, 森本郁代
2. 発表標題 話し合いの相を生み出す言語行動～話し合いの相移行期の考察(3)～
3. 学会等名 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会第83回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宇佐美洋, 文野峯子, 森本郁代, 岡本能里子, 柳田直美
2. 発表標題 「演じること」への参加はどのような学びをもたらすか: 「フォーラム・シアター」参加者の語りから
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第5回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村香苗, 宇佐美洋, 嶋津百代
2. 発表標題 参加者にとって「よい話し合い」とは?: 話し合いにおける「参加感」と「参加行為」の関係
3. 学会等名 第43回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳田直美
2. 発表標題 学習者用モバイル観察支援ツールFishWatchr Miniを用いた話し合い活動評価の実践
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳田直美
2. 発表標題 非母語話者は母語話者の「説明」をどのように評価するか - 評価に影響を与える言語行為の分析
3. 学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水上悦雄
2. 発表標題 話し合いで話し手/聞き手になるための声の間合い～「仲間」になるためのプロセスの分析～
3. 学会等名 日本認知科学会研究分科会「間合い - 時空間インタラクション」第13回分科会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 水上悦雄
2. 発表標題 話し合い実践を通じて何が変わったのか？～コミュニケーションの経時観察と予備的分析から～
3. 学会等名 LORC公開研究会「話し合いが、人・組織・まちを変える」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森本郁代
2. 発表標題 大学のゼミ活動における相転移 - GPI0サイクルの経験を通して
3. 学会等名 日本地域政策学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 水上悦雄, 劉礫岩, 森本郁代
2. 発表標題 話し合いの停滞期境界における参加者の振舞の分析 - 話し合いの相移行期の考察(2)
3. 学会等名 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宇佐美洋, 柳田直美
2. 発表標題 「参加型授業」に対する抵抗感はどこから来るのか：学習観の多様性に向き合うための事例研究
3. 学会等名 カナダ日本語教育振興会2017年年次大会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宇佐美洋
2. 発表標題 「測定される能力」から「解釈される能力」へ
3. 学会等名 異文化間における日本研究・日本語教育研究に関する国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柳田直美
2. 発表標題 非母語話者は母語話者の「説明」をどのように評価するか - 評価に影響を与える観点の分析 -
3. 学会等名 2017年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柳田直美
2. 発表標題 接触場面における日本語母語話者の言語管理 - 「母語」を意識化する作業を通して -
3. 学会等名 2016年度言語管理研究会分科会合同研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 柳田直美
2. 発表標題 日本語母語話者の「説明」に対する非母語話者評価の尺度開発
3. 学会等名 Bali-ICJLE2016 (パリ日本語教育国際研究大会) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 村田和代, 水上悦雄, 森本郁代
2. 発表標題 話し合いの可能性 - 異なる他者との対話を通じた相転移
3. 学会等名 社会言語科学会第44回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本能里子, 森本郁代, 柳田直美, 村田和代
2. 発表標題 外国人受け入れ側のコミュニケーション課題 - 選ばれる国を目指して
3. 学会等名 日本語教育学会2019年春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山口昌也, 柳田直美
2. 発表標題 観察支援システムFishWatchr Miniにおけるビデオ参照機能の実現
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 村田和代, 難波彩子, 植野貴志子, 山口征孝, 岡本雅史, 増田将伸, 横森大輔, 森本郁代, 片岡邦好, 井出里咲子, ブッシュネル・ケード, 釜田友里江, 首藤佐智子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 324
3. 書名 聞き手行動のコミュニケーション学	

1. 著者名 庵功雄, 岩田一成, 佐藤琢三, 柳田直美, 宇佐美洋, 木村護郎クリストフ, オストハイダ テーヤ, 菊池哲佳, 高木祐輔, 毛受敏浩, 中島明則, 本田弘之, あべやすし, 田中英輝, 打浪文子, 安東明珠花, 岡典栄, 杉本篤史, 松本スタート洋子, 志村ゆかり, 佐野香織, 吉開章	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ココ出版	5. 総ページ数 391
3. 書名 やさしい日本語 と多文化共生	

1. 著者名 村田和代, 森本郁代, 佐野亘, 井関崇博, 福元和人, 高梨克也, 唐木清志, 森篤嗣, 三上直之, 馬場健司, 高津宏明, 西芝雅美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 市民参加の話し合いを考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宇佐美 洋 (USAMI Yo) (40293245)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	柳田 直美 (YANAGIDA Naomi) (60635291)	一橋大学・森有礼高等教育国際流動化機構・准教授 (12613)	
連携 研究者	水上 悦雄 (MIZUKAMI Etsuo) (30327316)	国立研究開発法人情報通信研究機構・先進の音声翻訳研究開発推進センター・研究員 (82636)	
連携 研究者	嶋津 百代 (SHIMAZU Momoyo) (90756868)	関西大学・外国語学部・准教授 (34416)	